

# 市史通信

## 【目次】

- 写真で見る横浜の戦後
- 小型自動車競争・競艇・競犬  
—開催されなかった公営競技
- 100年前のエネルギー革新  
—石油と発動機をめぐる
- 開架資料紹介  
蚕業関係業界誌
- 市史資料室だより



写真1 開港記念日の伊勢佐木町7丁目付近 1953（昭和28）年6月2日  
庄司幸一氏撮影 庄司一利家資料

## 第30号

【発行日】2017年11月30日  
 【編集・発行】横浜市史資料室  
 〒220-0032  
 横浜市西区老松町1番地  
 横浜市中央図書館・地下1階  
 【電話】045-251-3260  
 【FAX】045-251-7321  
 【E-mail】  
 so-sisiryou@city.yokohama.jp  
 【ホームページ】  
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/gyosei/sisi/>

## 写真で見る横浜の戦後

### 焼け跡からの出発

横浜の戦後は、焼け跡からの出発であった。さらに、そこに連合国軍による占領と接収が重なる。市民の暮らしが再建される前に、中心部は米軍の街と化し、アメリカ文化が一気に横浜に流入してくる。そうした状況を、横浜らしさや独特のエキゾチズムが失われたと嘆く人も多かった（拙稿「占領軍のいた街」『市史通信』第一四号、二〇一二年七月三十一日参照）。

一九五二（昭和二七）年、占領が終わって、中心市街地の米軍施設の多くが返還されても、瑞穂埠頭や新港埠頭は接収されたままで、山下公園・本牧・根岸にあった米軍家族住宅の全面返還もなかなか進まなかった。一部の米軍施設が残るなか、一方で市民の暮らしと街並は徐々に復興を遂げていく。こうして、アメリカ文化と相まって、現在の横浜につながる戦後横浜ならではの景観や風情が育まれていった。

今回は、写真に記録されている戦後横浜の姿を見てみたい。写真に写し込まれた戦後の横浜といえは、焼け跡と米兵が闊歩する街並がその象徴であった。実際、米軍が撮影した写真の多くは、まさにそうした写真だった。

一方、当横浜市史資料室で二〇一二年に開催した、写真パネル展示会「占

領軍のいた街―戦後横浜の出発」では、日本人が撮影した写真をできるだけ展示するよう心がけた（報告書『占領軍のいた街―戦後横浜の出発』（横浜市史資料室、二〇一四年参照）。そこには、日本人の目に写った街並の変化と市民の暮らしがあった。今回は、新たに提供された写真を含め、米軍カメラマンと日本人が、一九五五年以前に撮影した写真から、未紹介のものを選んで紹介する。

上の写真1は、今年寄贈された庄司幸一氏撮影写真の一枚である。一九五三年六月二日、みなと祭の第一回国際仮装行列の当日、南吉田橋から伊勢佐木町七丁目付近を撮影している。一連の写真には仮装行列の写真もあり、これは行列が過ぎ去った後、名残を惜んでいる人々であろうか。伊勢佐木町七丁目界隈や南吉田橋の写真は、比較的珍しい。行事の行われた日とはいえ、大勢の人で賑わっている様子や、人々の服装がござっぱりとしていることから、市民の暮らしがようやく落ち着き、復興が本格化し始めようとしている息吹を感じさせる。

開港記念日の仮装行列は、戦前にも行われていた（高村直助「開港記念日の変更」横浜市史資料室『紀要』第一号、二〇一一年三月）。また、戦後、横浜で復活した文化行事のなかでも、たとえば一九四六年九月一五日の伊勢佐木復興祭で行われた復興祝賀行進や、一九四七年八月三〇日に、貿易復興祭



写真2 伊勢佐木町通りと福富町のカマボコ兵舎  
1953（昭和28）年7月16日 荘司幸一氏撮影  
荘司一利家資料

回目であった。  
写真2は、同じく一九五三年の七月一日に、荘司幸一氏が撮影した伊勢佐木町と福富町の写真である。伊勢佐木町四丁目の建物の上から通りを撮り込んで撮影したもので、手前に増築建設中の松喜屋とその奥に米軍のカマボコ兵舎群が望める。この写真より前一九五〇年頃に、おそらく同じ建物からカメラマン奥村泰宏が撮影したほぼ同角度的の写真がある（『昭和の横浜』横浜歴史資料室、二〇〇九年所収）。それを見ると、松喜屋の裏の増築部分（若葉町）がまだ接収中で、米軍の駐車場となっていた。返還されて、増築工事を始めたのだろう。

にちなんで行われた市民納涼仮装文化祭など、類似の行事が開催されていた。一方、開港記念日の行事は、戦中・戦後途絶えていたが、一九五〇年に本格的に再開されることになる。この年には、旗行列が行われ、花電車が運行されるなど、多くの人々を集めた。翌年から、名称も「みなと祭」に統一される。開港九五年を迎える一九五三年、横浜商工会議所では「一大名物となるような行事」を企画することになり、

決まったのが国際仮装行列であった。前年の平和条約発効により、占領が終結し、米軍施設の返還と復興への期待がふくらんでいたことも、背景にあった。その発案は、当時商工会議所議員だった牧野勲や作家の北林透馬であったといわれる。その後、毎年の恒例行事となり、今年二〇一七年は第六五

このように、戦後の横浜の街並は年々変わっていった。ちなみに、福富町のカマボコ兵舎群（キャンプ・コウ）が返還されるのは、一九五五年から翌年にかけてであり、その頃まで関内・関外地区を中心に、市内にはこうしたカマボコ兵舎群が点在していた。

一方、占領期、米軍の街と化していた横浜でも、接収地区の外では、市民の暮らしが息づいていた。米軍が撮影した写真の中にも、そうした日本人たちの様子を捉らえた写真がたくさんある。ここでは、市民の暮らしを紹介する印象深い写真を二枚紹介したい。いずれも、連合国軍の進駐から間もない一九四五年九月に、焼け跡で暮らす日本人を撮影したものである。場所は横浜とされているが、二枚とも目印にな



写真4 焼け跡にたたずむ少年  
1945（昭和20）年9月21日  
米国国立公文書館所蔵



写真3 焼け跡の散髪風景  
1945（昭和20）年9月  
米国国立公文書館所蔵・福林徹氏提供

る建物がなく、詳細は不明である。写真3は、焼け跡での散髪風景で、下に置いてある道具類を見ると本格的なもので、おそらく空襲で焼け出された散髪屋が露天で営業していたのではないかと推測される。写真4は、焼け跡にたたずむ少年を撮影したものが、その穏やかな表情と焼け跡のがれきの対照が、たいへん印象的である。散髪



写真5 大雪の日の桜木町駅  
1951（昭和26）年2月15日  
須田宏家資料

屋の女性はもんぺ姿、少年も戦闘帽をかぶっており、戦時中の面影を残している。焼け跡のなかで、戦時生活の名残を抱えながら、戦後の暮らしが始まっていたことを感じさせる写真である。

### 戦後横浜の街並

次に、街並の風景から紹介したい。写真5は、雪の日の桜木町駅である。提供者が、撮影したものと思われる。一九五一年二月一四日から、関東・東海・近畿・四国の各地は、「まれに見る大雪に襲われた」（『神奈川新聞』二月一六日）。各地で停電となり、交通機関も麻痺した。関東では、夜半過ぎ大暴風雪となったが、翌朝には一転晴れたという。この写真は、まさにその大雪の翌日一五日に、雪の残る桜木町駅舎と駅前を、おそらく市電乗り場付



写真6 米軍鉄道輸送事務所 (RTO) が入った横浜駅駅舎 (東口) 1949 (昭和24) 年 小林直明資料

近から撮影したものだろう。  
桜木町駅は、市内各地に向かう市電とバスの拠点駅であり、多くの人々が乗り降りした。その様子をとらえた写真は、写真集『昭和の横浜』や報告書『占領軍のいた街』に掲載したので、そちらもご覧いただきたい。  
一方、写真6は横浜駅舎 (東口) である。米軍に勤めていた小林直明氏が撮影した写真で、カラーポジフィルムで撮影したが、色はあせてしまっている。よく見ると、ひさしの上に「RTO」の文字が掲げられている。これは、米軍鉄道輸送事務所の略称である。一連の写真に、駅前の日本貿易博覧会案内所が写り込んでいる写真があり、一九四九年ということがわかる。  
占領期間中、連合国軍は将兵と家族



写真7 元台湾銀行横浜支店前に座り込む子どもたちと親 1945 (昭和20) 年9月 米国国立公文書館所蔵・福林徹氏提供

が乗る専用列車を仕立て、この駅舎内に事務所と専用の案内所・待合室を設けていた。ただし、実際に米軍将兵らが多く利用したのは、桜木町駅に隣接する貨物駅だった東横浜駅ともいわれる (河原匡喜『連合軍専用列車の時代』光人社、二〇〇〇年)。横浜駅は日本人と連合国軍が共用していたが、東横浜駅が米軍の専用駅となっていたのである。とくに部隊単位の移動の場合、東横浜駅を利用しようだ。米軍将兵らも、日本人との共用の横浜駅は避けられたかもしれない。そのためか、桜木町駅のようにターミナル駅らしい活気は、この写真からは感じられない。  
写真7・8は、日本大通りの写真である。写真7は、米軍が撮影した写真で、ビルの特定がされていなかった。特定するに当たっては、入口右に書き



写真8 日本大通り 1949 (昭和24) 年頃 小林直明資料

込まれた194という番号と、横浜支店が手がかかりとなった。番号は米軍がつけたビルディングナンバーではないかと考え、横浜市渉外部の接収関係の資料「進駐軍接収土地・建物一覧表」(横浜市史料室所蔵)を調べたところ、「194」は台湾銀行横浜支店の建物であることがわかった。  
同ビルは、戦後すぐに接収され、米第八軍の財務部の事務所が入っていたことがわかっているが、その後の記録がなく、接収解除・返還の経緯は不明である (『米第八軍の組織と人事』『横浜市史II』資料編1付録、横浜市、一九八九年)。『中区明細地図 昭和31年度版』(経済地図社、一九五六年八月)を見ると、アメリカ銀行横浜支店となっており、外国財産として扱われた可能性がある。  
写真8は小林直明氏撮影写真で、日本大通りをはさんで、おそらく横浜地方裁判所の建物から、台湾銀行横浜支店と日綿実業ビル (日本綿花横浜支店)

方面を写している。奥には、横浜公園球場の照明が見える。台湾銀行横浜支店の建物入り口と壁面の黒っぽいタイルの様子が、写真7と一致する。  
米軍は進駐当初、日本独特の地番の付け方にとまどい、建物の特定に便利なように、独自のビルディングナンバーをつけた。これは、後に米軍が建設した家族住宅にもつけられ、米軍のシティー・マップに記入されるようになる。  
やがて米軍の調達制度 (Procurement Demand、PD) が整えられていくにしたがい、接収土地・建物の管理は、日米共通にPDナンバーで行われるようになり、ビルディングナンバーは、家族住宅以外は使われなくなる。代わって、主要なビルには略称が用いられるようになる。たとえば、台湾銀行の場合はBTB (Bank of Taiwan Bank)、横浜税関はCB (Customs Building)、開港記念会館はMEH (Memorial Hall) といった具合である。

占領と米軍施設の名残が濃い戦後の横浜でも、横浜市民はしだいに暮らしを取り戻していった。米軍施設の返還にもなつて、街並の再建も進む。こうした過程すべてが、独特の戦後横浜を形づくっていたのである。  
(羽田博昭)